



# 地域なんでも情報局

令和6年11月13日発行  
長崎市社会福祉協議会  
長崎市恵美須町4番5号  
☎095-828-1281

## 福祉学習と地域との連携

長崎市社協は、「誰もが、ふだんのくらしの中で、しあわせを感じられるまち“ながさき”をみんなで作る」という理念を掲げ、様々な福祉活動を展開しています。その一つとして、福祉学習の支援を行っています。

学校からの依頼に応じて、高齢者疑似体験や車椅子・アイマスクなどの体験を実施しています。

これらの体験は二人一組を基本として、高齢者疑似体験では、学生自身が、おもり・肘膝固定用サポーター・ゴーグルなどを装着して、高齢者の生活動作と介助者の体験をします。また、車椅子体験で



は、体育館内及び周辺の段差やスロープ（坂道）の移動を、自力操作と介助操作の体験をします。さらに、アイマスク体験では、教室から階段・廊下を経由して教室に戻るなど、日頃利用している通路の移動を、全盲の視覚障がい者とその方のガイドヘルパーという組み合わせで体験します。

体験を終えたふりかえりでは、「高齢になると、身体が動きにくくなり不自由になる。何をしても大変だと解った。」

「介助や車椅子を操作するのが難しかった。」「目が見えない方が、私たち以上の感覚を持つて生活されていることが解った。」「困っている人を見たら、手伝えることがないか聞いて助けてたい。」など多くの感想が聞かれます。

このような感想から、体験された児童・生徒が、不自由な方々の生活のし辛さ、目が見えないことの恐怖心などを肌で感じ取れていることや、併せて、困っている方々を支援したいという感情を育む機会となっていることが分かります。

対して、自分たちにできることは何かを考えてもらえるよう、学習の支援を行っています。

また、地域の連携・協力も忘れてはなりません。例えば、畳屋から車椅子運搬用の軽トラの貸出や、介護機器販売メーカーから車椅子を提供いただくなど、地元の地域にある業者の協力がありません。さらに、保護者が見守りやアドバイスに駆けつけてくださるなど、福祉学習は多くの地域の方々にも学校、地域の方々、保護者の皆様の協力のもと、人々に優しい児童・生徒の育成と

ともに、誰もがしあわせを感じられる地域となるよう期待します。  
(田中康彦)



## 認知症になっても地域を

「自分ができることで、誰かが喜んでくれるのはうれしかー。」そう語るのはオレンジ色のエプロンを着た高齢のウエイトレス。

9月21日の世界アルツハイマーデーにちなんで、認知症に対する理解の普及啓発を目的にイオン東長崎店内で出張認知症カフェと徘徊模擬訓練を開催しました。

イオン東長崎店さんのご厚意で空きスペースを提供していただき、主催である東長崎地域包括支援センター、総合科学大学の学生など様々な方の協力を頂きました。

カフェでは、「物忘れ等があってもできることはたくさんある」を目標に、認知



知症当事者らがシンボルカラーであるオレンジ色のエプロンを着用し、ウエイトレスとして注文を取り、飲み物・茶菓子をお客さんに提供しました。総合科学大学の学生は、「不思議の国のアリス」をイメージして前日から会場の装飾をしていただき、当日は、ウエイトレスのサポートとして参加者と交流を深めました。

ウエイトレスはサービスマイトレスは飲み物をなみなみと入れ、運ぶときに後悔するというなごやかな場面も見られました。普段、そこまで外出することはないと語られる方も何かを任せられると機敏に動かれる姿を見て、社会参加を促すことの重要性を改めて考えさせられました。

本会では高齢者サロン等の気軽に参加できる場の創出や支援を行っています。より活気のある毎日を過ごすために、新しい楽しみを見つけてみませんか？

(戸畑 太一)

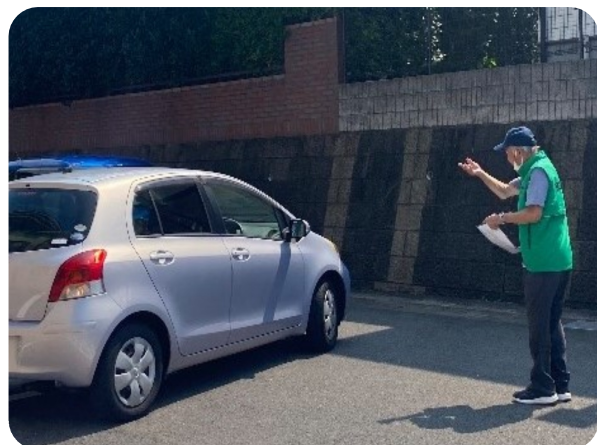
当会ホームページから「地域なんでも情報局」バックナンバーがダウンロードできます！  
「長崎 地域なんでも情報局」で検索♪  
下記QRコードからも見られます。





# 小ヶ倉とダイヤランドの子育てサロン

8月下旬、カンカン照りの中、精一杯手を動かして駐車案内をする明るい色のジャケットを羽織った男性たちの後ろ姿がありました。男性5人で奮闘している駐車場係は案内をしながら来客の方に「暑いですね、久しぶりですね、お元気でしたか？」と声掛けをします。



また、子育てサロンとふれあいセンター来訪者を瞬時に見分け、駐車場の仕分けをいきいきと行っておられました。男性は「日常的な声掛けのなかで、子供達と会話ができることが楽しみ。」と話されており、男女問わず地域のボランティアの方々が多様な形で子育てサロンを支えています。

このサロンの特色です。このサロンは、社協小ヶ倉支部とダイヤランド支部の民生委員・児童委員らが遊び教室のスタッフとして奮闘されています。

また二つの社協支部が合同で取り組んでいることも

二つの支部が一緒になって関わっているため、スタッフ同士のコミュニケーションが活発に行われています。「書類が届いた？」という何気ない声かけから、「そういえば、最近自分の関わる高齢者サロンでは、沢山の人が来てくれてねえ」とお互いの情報交換ができていますと話されていました。



支部の垣根を越えた交流は、互いの地域を活性化させ、二つの支部の絆も更に深まっていくことでしょう。生活支援コーディネーター

(山口 愛莉)

# 美味しく学べる料理教室

9月6日に三川地区ふれあいセンターで、料理教室が開催されました。当日は男性4名、女性14名、計18名の方が参加されました。



参加者は、調理室に入ると「エプロンば持って来なよ！」と各々自前のエプロンを身に付け、準備は万端です。調理の前に、食生活改善推進員が話す作り方の説明をみなさん真剣に聞いておられました。いざ調理が始まると、「まずは時間のかかるものから作らねばね」「私はお皿ば準備するけん」と各自で役割を探して取り組んでおられました。

コロナ禍による行動制限の困難を乗り越えて、今回は3年ぶりの開催となりました。

無事に調理が終わり、食事の時間です。「やっぱ自分で作ったご飯はおいしいかね」と小村富士子センター長。

食後には、市役所の管理栄養士の方から食事バランス・減塩についての話があり、「全然気にしたことなかけど、塩分も考えんばとね」と健康について学ぶ機会となりました。

食生活改善推進員の森さんは、「自分の好きな料理を通して、地域の方が喜んでくれるのはすごく嬉しい。地域の方が野菜をたくさん食べて、塩分を減らすきっかけになれば嬉しい」と笑顔でおっしゃっていました。みなさんも地域での料理教室を通して、楽しく栄養について学んでみませんか？生活支援コーディネーター

(岩岡 大樹)

# 地域の新たな居場所 カフェ「縁」

週末になると外海地区にあるカフェ「縁(えん)」には、高齢者たちが集まり、にぎやかな笑い声が響きます。この地域には高齢者サロンがありました。令和4年度で活動を終了しました。そのサロンの代わりとして、地域の新たな交流拠点となっています。



オーナーの田邊やす子さん、73歳になる今も保険の外交員として働きながら、「最後の楽しみ」として令和5年5月5日にカフェをオープンしました。「このカフェで地域の皆さんに楽しんでほしい。そして、自分自身の認知症予防にもなれば」と、田邊さんは笑顔で話します。

参加者の一人は、「ここに来ると、田邊さんがどんな悩みでも聞いてくれるし、気持ちも軽くなる」と話されます。また別の参加者は、「サロンが無くなって、こんなに集まるのが本当にありがたい。おしゃべりするだけで元気になる。」と嬉しそうに話してくださいました。

高齢者が家から外に出て、他者と話をすることが健康に大切だと田邊さんは強調します。その言葉には、地域住民

田邊さんは、「100歳までこのカフェを続けたい。背筋を伸ばしてコーヒーを入れていられたら、素敵でしょ」と微笑みます。これからも皆に愛される「縁」が、末長く続くことを期待します。生活支援コーディネーター



(福田 耕平)